

# 『順宗実録』についての一考察

後藤英明

## 序

永貞元年（八〇五）八月、憲宗の即位と宦官らの保守勢力の叛乱によって王叔文等改革グループは政権の座から追い落とされ、叔文等の目指す政治刷新はわずか七ヶ月で頓挫した。この一年に満たない順宗期の政変の一部始終を著述したものが、韓愈の『順宗実録』五巻である。ほんらい『実録』とは、後の正史編纂に備え、皇帝一代ごとにその詔や朝廷あるいは民間の出来事を編年形式によつてありのままに記録したものである。したがつてその内容は、何月何日にどういふ人物によつて何が為されたか、というドキュメントが時を追つて排列されているはずのものである。しかしながらこの『順宗実録』には、特定の個人を扱つた伝記と称すべきものが、巻三および巻四に長短取り混ぜて散見される。巻三では貞元二十年に亡くなり、翌永貞元年に礼部尚書を追贈された張薦、また令狐峒の伝が立てられ、さらに巻四に至つては、その紙幅の過半が永貞元年に亡くなつた張万福・陸贄・陽城の伝記に費やされている。これは一体何を意味するものなのか。清の曾國藩は、『順宗実録』に注を施す中で次のように述べている。

曾國藩曰、為張薦令狐峒立伝、俱不宜闌入実録中。若張万福陸贄陽城為一時偉人、王伾王叔文章執誼為一時姦回、自宜

詳叙頗末。然張陸陽皆德宗朝人、尚不宜闖入順宗實錄。独三姦為与順宗相終始耳。

曾國藩曰く、張薦・令狐峒が為に伝を立つるも、俱に宜しく實録中に闖入すべからず。若し張万福・陸贄・陽城もて一時の偉人と為し、王伾・王叔文・韋執誼もて一時の姦回と為せば、自ずから宜しく詳らかに頗末を叙すべし。然れども張・陸・陽は皆德宗朝の人なれば、尚宜しく順宗實録に闖入すべからず。独り三姦は順宗と相終始するを為すのみ、と。

個人の人柄や事績という点では、卷五の中でも王叔文、韋執誼らについて取り上げられている。が、これらは永貞元年にあつてはまさに時の人であり、永貞の政変を語る上では必要不可欠の人物と言え、なおかつその記述もその党派の結成から解体までを中心として政変に関わることに終始しているのである。反面、先に挙げた五人は永貞元年あるいはそれ以前に亡くなつた人物であつて、当然その事績も直接に永貞の政変に結びつくものではない。また、韓愈の彼らについての叙述が永貞以前のことで完結していることからしても、曾國藩の指摘は妥当なものと言えよう。

本論の目的は、永貞元年の編年史であるべき『順宗實録』において、韓愈が敢えて永貞の政変に直接に関わりを持たない張薦・令狐峒・張万福・陸贄・陽城の五人の伝を立てたのは何故か、ということを出発点に韓愈の人間評価を考察し、以て『順宗實録』の編纂にあつて上記のような結果が生じた原因を探ろうとするものである。かつて小野四平氏は、やはり韓愈が『順宗實録』の中で陸贄・陽城らを特記していることに触れているが<sup>4</sup>、本論ではこの問題をさらに深く掘り下げて考えてみたい。

『順宗実録』では便宜的に二か月分の記録を一巻としており、巻三では永貞元年四、五月分の、巻四では同年六、七月分の出来事を掲載している。ただ、前述の五人の伝を見ていくと、張薦・令狐峒の二人の記録と張万福・陸贄・陽城の三人の記録とは、その死亡や官位追贈の日時といった時系列上の制約だけでなく、その内容からもそれぞれを一つのまとまりとして取り扱うことができると思われる。そこで本章では、まず巻三に見られる二人の伝について分析を試みたい。

韓愈は、『順宗実録』巻三において張薦と令狐峒の二人の人物を取り上げることにより、自らが関心を抱く人物について、二つの典型を呈示していると考えられる。最初に伝が立てられている張薦は、五人の中ではその分量が最も短いものだが、彼の人となりについて韓愈は次のように紹介する。

薦 聰明強記、歴代史伝、無不貫通、為太師顔真卿所稱賞、遂知名。

薦 聰明強記にして、歴代の史伝は、貫通せざる無く、太師顔真卿の稱賞する所と為り、遂に名を知らる。

以下、大曆中に史館修撰となり、貞元年間には三回にわたって使者として吐蕃に赴き、旅先にて客死したことを述べたあと、伝を結ぶに当たって次のように述べている。

前後三使異国、自始命至卒、常兼史職。在史館二十年。

前後三たび異国に使いせしも、始めて命ぜられてより卒するに至るまで、常に史職を兼ね。史館に在ること二十年。

張薦は史館修撰の辞令を受けた後も様々な官職を歴任し、果ては外交使節として遠く西域にまで足を延ばすが、常に史館修撰を兼務するという形になっており、生涯賭けてその職責を全うした。韓愈が張薦に注目した理由は、まさにここにあると言えよう。官僚として生きていく上は、必ずしも望む仕事ばかりに就けるわけではなく、上層部の意向によって思いも寄らぬ職に振り向けられることもある。しかし張薦は歴史官こそ己が天職と信じ、その本分を忘れることはなかった。これこそが、韓愈をして『順宗実録』に張薦伝を立てさせた理由と考えられる。

なお、韓愈は特に言及していないが、貞元十一年、張薦が迴紇へ使節として派遣されることになったのは、徳宗の寵を得た裴延齡のさしがねであつた。『旧唐書』には次のようにある。

時裴延齡特寵、譖毀士大夫。薦欲上書論之、屢揚言未果。延齡聞之怒、奏曰、諫官論朝政得失、史官書人君善惡、則領史職者不宜兼諫議。徳宗以為然。薦為諫議月余、改秘書少監。延齡排擯不已、會差使册迴紇毘伽懷信可汗及弔祭、乃命薦兼御史中丞、入迴紇。

時に裴延齡寵を恃みて士大夫を譖毀す。薦は上書して之れを論ぜんと欲し、屢しば言を揚ぐるも未だ果たさず。延齡之れを聞いて怒り、奏して曰く、諫官は朝政の得失を論じ、史官は人君の善惡を書すれば、則ち史職を領する者は宜しく諫議を兼ねべからず、と。徳宗以て然りと為す。薦は諫議たること月余にして、秘書少監に改めらる。延齡排擯して已まず、会々(たまたま)使を差(つか)わして迴紇の毘伽懷信可汗を册し弔祭に及ばしめんとするに、乃ち薦をして御史中丞を兼ね、迴紇に入らしむ。

裴延齡の権力をほしいままにした振る舞いを張薦が再三にわたつて糾弾しようとした右の記録は、彼の剛直な性格を伝えるものだが、これを韓愈が記録していないのは、この年に同じく諫議大夫の職にあつた陽城が裴延齡の讒言から陸贄を救おうとして立ち上がったことと無関係ではない。その決起の模様については次章で詳しく述べるが、韓愈にとつて裴延齡に対する弾劾はあくまで陽城を称揚するための材料なのであつて、張薦の場合は歴史官として天職を全うしたところにその評価の中心があると考えられる。

次に、同じく卷三に見える令狐峒の伝について検討する。令狐峒には張騰に倍する紙幅が割かれているが、韓愈の記すところでは、その人となりはあまり好ましいものではない。大曆中、令狐峒は吏部尚書の劉晏に推挙された恩からか、南曹という官吏の欠員補充を担当する職権を利用して、有能な者を劉晏に回し、無能な者は吏部侍郎の楊炎のもとに送るといふ嫌味つたらしい行動に出る。のみならず、のちに楊炎が宰相となったとき、かつて師事した杜鴻漸の一子、杜封なる人物の推挙を巡って密かに当時礼部職にあつた令狐峒の助力を頼んだところ、峒はこれを奏上して以下のように言う。

峒謂使者曰、相公欲封成其名、乞署封名下一字、峒因得以記焉。炎不意峒売之、署名屬峒。峒明日疏言宰相炎迫臣以威、臣從之則負陛下、不從即炎當害臣。

峒使者に謂いて曰く、相公封もて其の名を成さんと欲すれば、封の名の下に一字を署すを乞う。峒因りて以て記すを得たり、と。炎は峒之れを売ると意わずして、署名して峒に属す。峒明くる日疏言して、宰相の炎は臣に迫るに威を以てし、臣之れに従えば則ち陛下に負き、従わざれば即ち炎は臣を害すべし、と。

裏工作をする楊炎の行為は確かに褒められたものではないかもしれないが、楊炎を陥れようとする令狐峒の言動もすこぶる陰險なものと言わなければならない。この密告により楊炎は徳宗の怒りを買ってしまうのである。

このような周囲の人間と容易に摩擦を引き起こす片意地な性格は、令狐峒伝の他の部分からも窺え、貞元の初めに史館修撰に抜擢された時に、同僚と軋轢を生じたなどという記事もある。結果、新たに宰相の位に就いた竇參に憎まれて吉州の刺史に流される事態を招くが、それでもなおその性格の改まることはなく、吉州では視察にやってきた監察使に対してなお次のような礼を失した対応に出るのだった。

齊映除江西觀察、過吉州、峒自以前輩、懷怏怏、不以刺史礼見。入謁、從容歩進、不袪首屬戎器、映以為恨。

齊映は江西觀察に除せられ、吉州を過るに、峒は自ら前輩を以てし、怏怏を懷き、刺史の礼見を以てせず。入りて謁するに、從容として歩き進み、抹（ばつ）首して戎器に属せざれば、映以て恨みと為す。

謁見するに際して頭巾をかぶつて軍装を整えるなどの作法をなわざりにしたことから、監察使の反感をかつてまたも衢州別駕（刺史の副官）に貶され、順宗の即位によつて都に呼び戻すべく使者が赴いたときには既に世を去つていた。

かように、韓愈の記述に拠れば対人関係における圭角さばかりが目立つ令狐峒であるが、しかし『旧唐書』を見ると、晩年の衢州別駕時代、次のような人との交流があつたことが知られる。

衢州刺史田敦、峒知舉時進士門生也。初峒當貢部、放榜日貶逐、与敦不相面。敦聞峒来、喜曰、始見座主。迎謁之礼甚厚、敦月分俸之半以奉峒。

衢州刺史田敦は、峒知舉の時の進士門生なり。初め峒貢部に当たり、放榜（科擧の成績を揭示する）の日に貶逐せらるれば、敦と相面せず。敦峒の来るを聞き、喜びて曰く、始めて座主に見ゆ、と。迎えて之れに謁するに礼甚だ厚く、敦は月に俸の半ばを分けて以て峒に奉る。

以上、『順宗実録』『旧唐書』両書の記述から推すに、令狐峒という人物は、氣に入つた人間と交流を深めることはあつても、意に染まぬ者に対してはこれに手ひどい攻撃を加えることも辞さず、要するに他人との接し方の落差が自らの好悪を基準としてはなほ大きく、また現実の行動の上でもそれが徹底しているといえる。

韓愈が令狐峒の狷介孤高なさまを縷々羅列するのは、むしろその人格を称讃したからではなく、自我の強さが対人関係に破綻をもたらすほどのものであつたことを強調して、張薦との差異を際立たせたためと見られる。峒に好意を寄せた人物の挿話を韓愈が省くのもその表れだろう。韓愈はまた、歴史官としての峒を次のように記す。

峒、国子祭酒德棻玄孫、進士登第。司徒楊綰未達時、遇之以為賢。為礼部修史、引峒入史館、自華原尉拜拾遺、累遷起

居舍人。(中略) 峴在史館、修玄宗実録一百卷、撰代宗実録三十卷。雖頗勤苦、然多遺漏、不称良史。

峴、国子祭酒德棻の玄孫にして、進士の登第なり。司徒楊綰の未だ達せざる時、之に遇いて以て賢と為す。礼部修史と為し、峴を引きて史館に入り、華原の尉より拾遺を拜し、起居舍人に累遷せしむ。(中略) 峴史館に在りては、玄宗実録一百卷を修し、代宗実録三十卷を撰す。頗る勤苦すと雖も、然れども遺漏多く、良史と称されず。

張薦が優れた史官であった旨を記す一方、令狐峴については「頗る勤苦」と、己が職責を全うすべく尽力したことは書き添えながらも、韓愈の『順宗実録』に先んずる実録をものしながらその評価が芳しくないことを述べる。これもまた、韓愈が自我の強い人間を二つの類型に分けようとする意図の現れか。他方、先に見た『旧唐書』令狐峴伝では、峴の歴史官としての側面に触れ左のように述べている。

峴博学、貫通群書、有口弁、綰甚称之。及綰為礼部侍郎、修国史、乃引峴入史館。自華原尉拜右拾遺、累遷起居舍人、皆兼史職、修玄宗実録一百卷、代宗実録四十卷。著述雖勤、属大乱之後、起居注亡失、峴纂開元、天宝事、雖得諸家文集、編其詔策、名臣伝記十無三四、後人以漏落処多、不称良史。

峴博学にして、群書に貫通し、口弁有り、綰甚だ之れを称す。綰礼部侍郎と為るに及び、国史を修め、乃ち峴を引きて史館に入らしむ。華原の尉より右拾遺を拜し、起居舍人に累遷し、皆史職を兼ね、玄宗実録一百卷、代宗実録四十卷を修む。著述に勤しむと雖も、大乱の後に属すれば、起居注亡失し、峴開元、天宝の事を纂するに、諸家の文集を得、其の詔策を編むと雖も、名臣伝記十に三四無く、後人以て漏落する処多しとし、良史と称されず。

『順宗実録』では令狐峴が司徒の楊綰の手引きで史館の職を得たという事実関係が簡素に記されているだけだが、『旧唐書』には、歴史官としての峴に対する賛辞と、彼が編纂した実録の不備には安史の大乱による資料の散佚等それなりの理由があったとする擁護の姿勢が見られる。対象とする人物が同じであっても、それを記録する人間によって光を当てる角度が異なる。

るのは当然だが、峴の人物は別として、楊綰が峴に目をかけたという事実関係から史官としての優秀さに言及するのは自然な流れであろう。だが韓愈は、先に掲げた令狐峴伝に「司徒楊綰の未だ達せざる時、之れを遇して以て賢と為す」とあるように、楊綰の見方を借りるのみで張薦伝に見られるような積極的な評価を敢えて避けている。これは、愈が史官としての峴を低く見ていたことの証左といえよう。

韓愈はこの人物について、あちこちで周囲の人と折り合わずに凋落して行くさまを淡々と述べ、その人となりについて私見を示すことはしない。では、ことさらにこの令狐峴の伝を長々と永貞元年の記録の間に差し挟んだのは、いったい如何なる意図に因るものなのか。『順宗実録』に拠れば令狐峴は右に紹介したごとき頑なな人物であつたが、これは見方を変えれば、韓愈の評価する人間の一反形ということになる。すなわち、基本的には令狐峴も張薦のように自らの信念、あるいは志向を押し通す型の人間なのである。だが、そのあまりに依怙地な性格が災いして、自我の強さが周囲の人間の意向をまったく無視するという方向へ極端に増幅されてしまった。ためにまわりの人間から敬遠されたり憎まれたりすることが一再ならずあつたのである。

韓愈が『順宗実録』に立てた五人の伝の中で陸贄と陽城とを最も重要視していたことは、その分量や描出の方法から見ても明らかだが、張薦と令狐峴とは、陸・陽に先んじて自我の強い人間の類型を語る上で、好都合だつたと考えられる。

## 二一一、直情径行な軍人

続いて巻四に移る。ここでは前述のように陸贄と陽城とに重きがおかれ、韓愈が理想とする人物像が彼らの履歴を借りて



述べられていると見ることが出来る。以下、この二人について詳細な検討を試みたいと思うが、ただ、その二人の伝を語る前に、陸贄・陽城の前座のような形で置かれている張万福の伝を見ておきたい。韓愈は冒頭、張万福の人品を次のように伝えている。

自曾祖至父皆明經、官止畧令州佐。万福以祖父業儒皆不達、不喜書、学騎射。年十七八、從軍遼東、有功、為將而還。曾祖より父に至るまで皆經に明るきも、官は畧令州佐に止まる。万福祖父の業たる儒を以て皆達せず、書を喜ばず、騎射を学ぶ。年十七八にして、遼東に從軍し、功有り、將と為りて還る。

經学を好まず武芸に秀でた張万福であるが、韓愈は彼の武人としての生涯を語るに当たり、許杲なる賊將の一派との戦いを軸に伝を構成する。万福は始め寿州刺史を拜命し、このとき年貢を強奪せんとした賊を誅殺するという功績があったが、時の淮南節度使崔円とは折り合い悪く、刺史の職を失うに至る。万福はしかしこれに動ずることはなく、許杲が淮南の地を窺うようになってからは、かえって万福の武勲を恃んだ崔円により刺史として寿州、舒州など許杲との係争地に送り込まれ、相応の働きを見せた。のちには都に召喚されて、時の代宗からも和州刺史として許杲誅滅を任された。さらに徳宗の時代には、濠州節度使を拜命すると、杜亜なる人物に嫌われ、張万福は耄碌した、などと帝に告げ口をされることもあった。が、万福はこれを意に介さず、己の信ずるところにしたがって陽城の応援に駆けつけたことを韓愈は伝の最後に書き添えている。

至賀陽城等於延英門外、天下益重其名。二十一年以左散騎常侍致仕。元和元年卒、年九十。万福自始從軍至卒、祿食七年、未嘗病一日。典九郡、皆有惠愛。

陽城等を延英門の外に賀するに至りて、天下益々其の名を重んず。二十一年左散騎常侍を以て致仕す。元和元年卒す、年九十。万福始めて從軍してより卒するに至るまで、祿食すること七十年、未だ嘗て病むこと一日としてあらず。九郡を典するに、皆惠愛有り。

卷四で張万福、陸贄に続いて語られる陽城は、貞元十一年、裴延齡の暴政に対抗して陸贄救済に立ち上がったのだが、万福はわが国にも直臣ありとして陽城に肩入れしたのだった。

このように張万福という人物は、そのまっすぐな性格から人に疎まれることもあったが、幾多の障害にも拘わらず自らの道を全うした点は、武官と文官との違いはあっても、先の張薦と通ずるものであった。

## 二―二、悲運の宰相

では、『順宗実録』において最も念入りに描き込まれている陸贄について検討してみたい。冒頭、韓愈は翰林学士としてその卓越した文才が周囲を驚嘆させたことを述べ、さらに以下のように言う。

常啓徳宗言、方今書詔、宜痛自引過罪己、以感人心。昔成湯以罪己致興、後代推以為聖人。楚王失国亡走、一言善而復其国、至今称为賢者。陛下誠能不悛改過、以言謝天下、臣雖愚陋、為詔詞無所忌諱、庶能令天下叛逆者迴心喻旨。徳宗從之。

常に徳宗に啓して言う、今に方りて詔を書するに、宜しく痛く自ら過ちを引き己を罪して、以て人心に感ずべし。昔成湯は己を罪するを以て興るを致し、後代推して以て聖人と為す。楚王国を失いて亡走するに、一たび善を言いて其の國を復し、今に至りて称して賢者と為す。陛下誠に能く過を改むを悛（やぶさ）かにせず、以て言いて天下に謝するに、臣愚陋なりと雖も、詔詞して忌諱する所無しと為し、庶わくは能く天下の叛逆者をして迴心喻旨せしめんことを、と。徳宗之れに従う。

陸贄の優秀さを紹介しつつ、詔勅起草に関して皇帝に直言してはばからぬ彼の態度を描くことよって、その人柄の実直さをも暗に仄めかしている。なお、『旧唐書』『新唐書』ともにこの挿話を載せていない。正史では省かれるような話を敢えて書き添えるところに、韓愈が陸贄の人物造形を為すに当たって何を重視していたかが窺えよう。

ところで、貞元八年に宰相まで務めた賈参が失脚し死を賜るという事件があったが、世上にはこの政変についてその原因を陸贄の讒言によるものとする向きがあった。このことについて『順宗実録』を見ていくと、韓愈は賈参が処断されるに至る経緯を述べるにあたり、まず参の失言を挙げて次のように言う。

德宗常与参言故相姜公輔罪、参漏其語。参敗、公輔因上疏自陳其事非臣之過。德宗詰之、知参洩其語、怒、未有所發。德宗常に参と故相 姜公輔の罪を言うに、参 其の語を漏らす。参敗れ、公輔因りて上疏して自ら其の事の非臣の過たるを陳ぶ。德宗之れを詰り、参の其の語を洩らすを知り、怒るも、未だ発する所有らず。

德宗はしばしば故相、姜公輔の失政について賈参と語ったが、この德宗の発言は参が口を滑らせたために姜公輔本人の知るところとなり、公輔が自らの非を上疏する事態となった。内輪の話を口外した賈参の軽率さを德宗が愉快に思うはずはないが、德宗はこの件については目をつぶって取立てをしなかった。しかし、賈参が引き起こした今ひとつの事件により参を取り巻く状況は急転する。郴州（今の湖南省郴州市）に貶された賈参が、劉士寧なる人物から金品を受け取り、士寧を汴州節度使とするために運動していた事実が発覚するのである。韓愈は左のように指摘する。

会罢奏汴州節度劉士寧遣参金帛若干。士寧得汴州、参处其議、士寧常德之、故致厚贖。德宗以参得罪而以武將交結、発怒、竟致参於死。

会たま罢は汴州節度 劉士寧の参に金帛若干を遣わすことを奏す。士寧の汴州を得るは、参 其の議を処すればなり、士

寧常に之れを徳とし、故に厚賔を致す、と。徳宗 参の罪を得て而も武將を以て交結するを以て、怒を発し、竟に参を死に致す。

寶参はかつて李巽という人物を左司郎中の職から地方の刺史へ放逐したために巽の恨みを買っていたが、のちに郴州に在つて劉士寧との交流を深めていたとき、湖南觀察使を務めていたのが巽であった。ために寶参と劉士寧との結託ぶりはたちまち李巽の耳に入り、巽の奏上によつて徳宗の知るところとなつた。姜公輔の一件では黙っていた徳宗も、寶参が藩鎮勢力と関わりを持つに及んで激怒し、ついに参を断罪した。

以上が、『順宗実録』に記される寶参失脚の原因であるが、そこから陸贄との直接的な関連性を読み取ることがはまつたかできない。ただ、最後に愈は寶参失脚の顛末を陸贄の伝に書き加えることについて、「而れども議する者多く参の死は贄に由ると言う」と世人の多くが陸贄に非ありとしていることを挙げるに過ぎない。

陸贄に疑いの目が向けられる背景には、もともと陸贄と寶参とはお互いに快く思っていなかつたという事実があり、韓愈も次のように記す。

中外属意、且夕嫉其為相。寶参深忌之、贄亦短参之所為、且言其黷貨、於是与参不能平。

中外意を属して、且夕其の（陸贄を謂う）相と為るを嫉つ。寶参深く之れを忌み、贄も亦参の為す所を短とし、且つ其の貨を黷（けが）すを言えば、是に於て参に与するに平らかなる能わず。

兩人の不和を知る人々にとつて、寶参が処断された背景に陸贄を見出そうとするのも無理からぬことであるが、韓愈はこれを直接寶参の失脚に結びつけるような書き方はしていない。

さて、韓愈が列挙する右の二つの事件のうち、陸贄に端を發するとされるのは前段の姜公輔の一件で、姜公輔に告げ口し

たのは賈參ではなく陸贄ではないかとするものである。このことについて、『旧唐書』陸贄伝では次のように言う。

贄在中書、政不便於時者、多所條奏、德宗雖不能皆可、而心頗重之。初賈參既貶郴州、節度使劉士寧餉參絹數千匹、湖南觀察使李巽與參有隙、具事奏聞、德宗不悅。會右庶子姜公輔於上前聞奏、稱賈參嘗語臣云陛下怒臣未已、德宗怒、再貶參、竟殺之。時議云公輔奏賈參語得之於贄、云參之死、贄有力焉。

贄中書に在りしとき、政時に便ならざる者、條奏する所多く、德宗皆可とする能わずと雖も、心に頗る之れを重んず。初め賈參既に郴州に貶され、節度使劉士寧參に絹數千匹を餉（おく）り、湖南觀察使李巽參と隙有れば、具さに事を奏聞し、德宗悦ばず。会たま右庶子姜公輔上の前に於いて聞奏し、賈參嘗て臣に語るに陛下臣に怒ること未だ已まずと云うと稱すれば、德宗怒り、再び參を貶し、竟に之れを殺す。時に議するもの公輔賈參の語は之れを贄に得たりと奏すと云い、參の死は、贄に力有ればなりと云う。

姜公輔の奏上が賈參断罪の直接の契機として李巽の奏上の後に記され、先に見た『順宗実録』の記述とは事の次第が逆転しているのが目に付くが、ここで注意しておきたいのは、その叙述の仕方である。陸贄が德宗の信頼を得ていたと伏線を張つてから公的な記述をし、その後引用の形をとつて、姜公輔の奏上は陸贄の失言によるものであり、姜公輔が事実を述べなかつたのは陸贄の権力によるものとする辺り、『順宗実録』の場合と同じく「議云」と世人の口を借りながらも、韓愈の記述に比べて總体的に陸贄に対し疑惑を抱いた書き振りである。さらに姜公輔の伝に目を転ずると、『順宗実録』では公的記録とは別に世評として付け加えられていた陸贄への疑惑が明確に史実として描かれている。

洎陸贄知政事、以有翰林之旧、数告贄求官。贄密謂公輔曰、予嘗見郴州賈相、言為公奏擬救矣、上旨不允、有怒公之言。公輔恐懼、上疏乞罷官為道士、久之未報。後又廷奏、德宗問其故、公輔不敢洩贄、便以參言為對。帝怒、貶公輔為泉州別駕、又遣中使齎詔責賈參。

陸贄政事を知るに洎（およ）び、翰林の旧有るを以て、數しば贄に告げて官を求む。贄密かに公輔に謂いて曰く、予嘗て郴州の賣相に見え、言公が為に奏すること數しばならんと擬するも、上旨允さず、公を怒るの言有り、と。公輔恐懼し、上疏して官を罷め道士と為らんことを乞うも、之を久しうして未だ報せず。後に又廷奏すれば、徳宗其の故を問うに、公輔取えて贄と洩らさず、便ち參の言を以て対えと為す。帝怒り、公輔を貶して泉州別駕と為し、又中使を遣わし詔を齎して賣參を責めしむ。

下つては『資治通鑑』の記載も『旧唐書』姜公輔伝にそのまま扱つた内容となつてゐる。なお、『新唐書』陸贄伝では、贄の中で「世に賣參の死は、贄其の言を漏らせばなりと言は、非なり。」と言及しており、韓愈の見方に従うものとして注目されるが、その陸贄伝自体はやはり『旧唐書』の内容を襲つたものとなつてゐる。

こうしてみてみると、姜公輔が賣參から聞いたとして奏上したのは表向きのことであつて、実は陸贄の失言によるものであるとするのが韓愈の当時から多くの人々が取つてきた見方であり、正史編纂にあつてもそれは無視できないほどの説得力を持つものであつたといえる。そのような中で『順宗実録』に見られる韓愈の姿勢には、巷間に取りざたされる陸贄への疑惑を晴らし、自らの信ずる事実を伝えようという意気込みが窺え、そこに陸贄の人となりが高く評価する韓愈の立場を読み取ることができよう。

さて、陸贄が賣參と並んで深く関わることとなつた裴延齡との一件について検討する。裴延齡は宰相となつた陸贄が自分とは相容れぬ人間であると知ると、その排除に乗り出した。この動きに同調した翰林学士の呉通玄は頻りに陸贄の欠点を並べ立て、片や同じく宰相職にある趙愬は陸贄の権勢を妬み、陸贄が裴延齡糾弾を企てっていると延齡本人に耳打ちする。すなわち、延齡の罪状を奏上せんとした「裴延齡奸蠱を論ずる書」である<sup>10</sup>。もとより延齡を寵愛してやまなかつた徳宗は、貞

元十年、これを目にするや激怒して陸贄の失脚が決定する。韓愈は、要路から放逐された陸贄の様子を次のように記す。

延齡益得以為計。由是天子益信延齡而不直贄、竟罷贄相、以為太史賓客、而黜張滂李充等權。言事者皆言其屈。贄固畏懼、至為賓客、拒門不納交親士友。

延齡益々以て計りごとを為すを得たり。是れ由り天子は益々延齡を信じて贄を直とせず、竟に贄を相より罷し、以て太史賓客と為し、而して張滂・李充等の權を黜く。事を言う者は皆其の屈を言う。贄は固より畏懼し、賓客と為るに至り、門を拒み交親士友を納れず。

裴延齡との政争に敗れ太史賓客の地位に甘んずることとなつた陸贄は、恐れ戦いて自ら門を閉ざし、友人との交流すら断つてしまふのだつた。だが、陸贄に対する追及はこれに止まらなかつた。彼を徹底的に叩き潰そうとする裴延齡の執拗さを、韓愈は次のように表現する。

春旱、德宗數獵苑中、延齡疏言、贄等失權怨望、言於衆曰、天下旱、百姓且流亡、度支愛惜、不肯給諸軍。軍中人無所食、其事奈何。以揺動群心、其意非止欲中傷臣。

春旱、德宗數々苑中に獵し、延齡疏言するに、贄等權を失いて怨望し、衆に言いて曰く、天下旱り、百姓は且に流亡せんとするに、度支愛惜し、諸軍に給するを肯わず。軍中の人食らう所無く、其の事奈何せん、と。以て群心を揺動し、其の意は臣を中傷せんと欲するのみに止まるに非ず、と。

早魃に見舞われた貞元十一年春、裴延齡は軍隊における食糧不足の内情が陸贄らの口から暴露されたと奏上する。陸贄はかつて宰相であつたとき、大量の馬草を苑中に送るべしとする裴延齡の意見に対して、それは百姓に苦役を強い、また農作業の妨げともなると異を唱へたことがあつた。裴延齡はこれを恨みとし、度支の食料出し惜しみであるが如く述べ立てる陸贄は、度支たる裴延齡を中傷するのみならず、左遷の憂き目に遭つた怨嗟から人心攪亂を狙つてゐる、と德宗に告げ口したの

である。結果、陸贄は忠州別駕を拜命し、遠く地方への流謫に甘んずることを余儀なくされた。

この徹底した追い落とし運動により中央政府における活躍の場を失った陸贄について、伝の最後に韓愈は述べる。

徳宗在位久、益自攬持機柄、親治細事、失君人大体、宰相益不得行其事職、而議者乃云由贄而然。贄居忠州十余年、常閉門不出入、人無識面者。避謗不著書、習医方、集古今名方為陸氏集驗方五十卷、卒於忠州。年五十二。上初即位、与鄭余慶陽城同徵、詔始下、而城贄皆卒。

徳宗位に在ること久しくして、益々自ら機柄を攬持し、親ら細事を治むれば、君人の大体を失い、宰相は益々其の事職を行うを得ざるも、而も議する者は乃ち贄に由りて然るを云う。贄は忠州に居ること十余年、常に閉門して出入せず、人に識面する者無し。謗を避けて書を著さず、医方を習い、古今の名方を集めて陸氏集驗方五十卷を為り、忠州に卒す。年五十二。上初めて位に即くや、鄭余慶・陽城と同一に徴して、詔始めて下るも、而も城・贄皆卒す。

忠州に追放された陸贄はもはや政界において自らの意地を通す手立てを失ったと知るに及んで、ひとり著述に専念する境遇に身を置き、宰相の地位から転落したときと同様、家にこもってまったく人を近づけようとしなかった。韓愈は、孤独な晩年を送らざるを得なかつた陸贄の姿を描き、かつ裴延齡にいいように操られた徳宗を暗に批判することによって、一徹な陸贄の性格を伝えると同時に、強大な権力によつて己の可能性を発揮する場から締め出された者の哀しみを痛切に呈示していると見ることができる。



つづいて、陸贄と並んで大幅な紙面が割かれている陽城の伝に視点を移そう。『順宗実録』によれば、陽城は学問を好んで人望も厚く、郷里の人々は争いごとがあると役所に向かず陽城に相談するほどであった。彼が諫議大夫の辞令を受けたときの長安の人々の反応を韓愈は次のように伝えている。

未至京師、人皆想望風采、云、城山人能自苦刻、不樂名利、必諫靜死職下。咸畏憚之。既至、諸諫官紛紛言事、細碎無不聞達、天子益厭苦之。

未だ京師に至らざるに、人皆風采を想望し、云く、城は山人にして能く自ら苦刻し、名利を楽しまず、必ず諫靜して職下に死せん、と。咸畏れて之れを憚る。既に至るに、諸諫官紛紛として事を言い、細碎聞達せざること無ければ、天子益々之れを厭苦す。

世人の口を借りて人品備わつた陽城の人となりを紹介しているが、韓愈自身が彼を高く買っていることを窺わせる冒頭の一文である。陽城はしかし、都に至るも弟たちと連日大酒を飲み、諫議大夫として自らの能力を発揮することはなかった。このころの黙して語らぬ陽城に対しては、貞元八年、二十五歳の韓愈が「争臣論」の一篇を以て痛烈に批判しており、いまその一節を引くと、次の如くである。

問其官、則曰諫議也。問其祿、則曰下大夫之秩也。問其政、則曰我不知也。有道士、固如是乎哉。且吾聞之、有官守者、不得其職則去。有言責者、不得其言則去。今、陽子、以為得其言、言乎哉。得其言而不言、与不得其言而不去、無一可者也。

其の官を問えば、則ち曰く、諫議なり、と。其の祿を問えば、則ち曰く、下大夫の秩なり、と。其の政を問えば、則ち曰く、我知らざるなり、と。有道の士、固より是くの如くならんや。且つ吾之れを聞けり、官守有る者、其の職を得ざるときは則ち去る。言責有る者、其の言を得ざるときは則ち去る、と。今、陽子、其の言を得たりと以為（おも）わば、

言わんか。其の言を得て言わざると、其の言を得ずして去らざると、一も可なる者無し。

『孟子』の一節を踏まえながら<sup>12</sup>、職責を全うしようとしぬ陽城を弾劾する韓愈の舌鋒は極めて鋭い。ところが時移つて三年後の貞元十一年、裴延齡の讒言を受けて貶謫の憂き目にあつた陸贄を救出せんと立ち上がったのが、ほかでもないその陽城であつた。一度は非難を浴びせた陽城が義に立ち上がったのを知るや、韓愈は我が意を得たりといった心境であつたろう。なお、雌伏していた時期の陽城について『順宗実録』を参照すると、当時の陽城については保身を第一に考えていたように描かれている。すなわち、職務に励まない彼を諍るためその真意を探ろうとやつて来る者があると、大酒してまともな会話を成り立たせなくしたり、世人に無用の疑いを抱かせないように、身内の者に対して蓄財を厳に戒めたりしていたなどである。が、陽城に対する直接的な非難の文言は見当たらず、むしろこの部分から、後段の陸贄救済に立ち上がった陽城との違いを際立たせ、彼の変身振りを読む者に印象付けようという韓愈の意図を汲み取るべきだろう。

さて、『順宗実録』に描かれる陽城決起の様子を見ると、その表現はいささか芝居がかつている。

至裴延齡讒毀陸贄等、坐貶黜、德宗怒不解、在朝無救者、城聞而起曰、吾諫官也、不可令天子殺無罪之人、而信用姦臣。即率拾遺王仲舒數人守延英門上疏、論延齡姦佞、贄等無罪狀。

裴延齡 陸贄等を讒毀するに至り、貶黜に坐し、德宗の怒り解けず、朝に在りて救う者無ければ、城聞きて起ちて曰く、吾諫官なり、天子をして無罪の人を殺して姦臣を信用せしむるべからず、と。即ち拾遺の王仲舒數人を率いて延英門を守りて上疏し、延齡の姦佞にして、贄等に罪狀無きことを論ず。

まさに千両役者の登場の如くである。実のところ陸贄救済を目指したこの諫諍事件は、陽城の生涯における一世一代の晴舞台と言え、だからこそ右に見える韓愈の書き振りとなるのだろう。この延英門における陽城の極諫に驚嘆したのが、先にも述べた張万福である。陸贄伝に見える張万福の描写は万福自身の伝で軽く触れられているとは異なり、左に掲げるとおり改

めて詳しく述べられている。これは、先に述べた陽城の決起にさらに劇的な効果を付加する狙いによるものと見られる。

於是金吾將軍張万福聞諫官伏閣諫、趨往、至延英門、大言賀曰、朝廷有直臣、天下必太平。遂徧拜城与仲舒等曰、諸諫議能如此言事、天下安得不太平也。已而連呼、太平万歳、太平万歳。

是に於て金吾將軍張万福 諫官の間に伏して諫むるを聞き、趨り行き、延英門に至り、大いに賀を言いて曰く、朝廷に直臣有り、天下必ず太平ならん、と。遂に徧く城と仲舒等を拜して曰く、諸諫議能く此くの如く事を言うに、天下安くんぞ太平ならざるを得んや、と。已にして連呼す、太平万歳、太平万歳、と。

この事件によつて『順宗実録』巻四で取り上げられた三人が一点に集約され、韓愈の人物評価の基準がどこにあるかが浮き彫りになつてきているのがわかる。すなわち、己を省みず義のために立ち上がった陽城、それを称讃する張万福、そして政治家として自らの信じる道を進もうとついに道半ばにして倒れた陸贄、これらの三人から引き出される人物像は、周回を右顧左眄することなく信念に基づいて生きる者たちと言つてよい。

徳宗の怒りを買つた陽城はこのち国子司業に貶されるが、地位が下がつてもふさぐことなかつた。かつての陽城の門弟に薛約なる人物がおり、舌禍事件を起こして流謫が決まっていた身であつたが、陽城は構うことなく独断で杯を交わしてこれを見送つた。ために彼は罪人に与する者として徳宗の怒りを買ひ、自らも道州刺史として流されることとなる。二度にわたる放逐を被つた陽城であるが、しかしこののちも、ついに己を曲げるようなことをしなかつた。陽城が治める道州の租税が滞納していたため、觀察使の指示により判官が派遣されたさい、陽城は次のごとき珍妙な対応に出たのである。

觀察使嘗使判官督其賦、至州、怪城不出迎、以問州吏、吏曰、刺史聞判官来、以為己有罪、自囚於獄、不敢出。

觀察使嘗て判官をして其の賦を督せしめ、州に至るに、城の迎えに出でざるを怪しみて、以て州吏に問うに、吏曰く、刺史は判官の来るを聞きて、以て己に罪有りと為し、自ら獄に囚われ、敢えて出でず、と。

自らを投獄するとはすこぶる芝居がかった酔狂な行為であるが、自らの失政に対しても容赦なく厳格に臨んでいるものと見れば、陽城の頑ななまでに実直な性格が滲み出ているものとして理解できよう。

## 結

以上、『順宗実録』巻三・巻四に見られる伝を瞥見してきたが、これまでに述べたことを纏めると、巻三の張薦・令狐峒の伝では、頑なに自分の意志を守り通そうとする人間には、二つの蓋然性があることが提示されている。ひとつには困難があっても自らの仕事を全うしようとする方向であり、いまひとつは自我の強さのために周囲と衝突を繰り返し果ては自滅するという方向である。次いで巻四では、義に殉じた陸贄・陽城とそれを称讃してやまぬ張万福を紹介することにより、自らの信じるどころにしたがって生きる人間の価値を後世に伝えようとしたのだ、と考えられる。とりわけ陸贄と陽城については、巻四に先んじて、徳宗の恩赦が下り彼らに召還の命が出され世人皆喜んだものの、両名は知らせを聞くことなくすでに世を去っていたことがすでに記されているのである<sup>13</sup>。たんに宮廷に於ける事実の記録ということであれば、官位の追贈を除いて彼らに関する記載はこれで終るはずである。また、これらの人々をたんに称讃するだけであるならば、何も『順宗実録』の中に敢えて入れることなく、別に一文を以てすれば済むことのように思われる。最後に、その理由について考えてみたい。

これまで『順宗実録』の伝についてのみ考察してきたが、もとより『順宗実録』は本論の冒頭で述べたように永貞元年に起きた事件をありのままに記録した編年史である。したがってそこに見られる基本的な話柄は、むしろ順宗の数か月間に起

きた一大事件、王伾・王叔文一党の政権奪取とその挫折である。かねてより指摘されていることだが、そもそも韓愈は王伾・王叔文等の改革グループに対して敵対心を持つてはいたものの、『順宗実録』ではその政策を貶しめることなく客観的な叙述に終始しており、そこに王叔文政権に参与していた友人の柳宗元や劉禹錫に対する暗黙の弁護が見られる<sup>14</sup>。そこで本論で中心的に扱ってきた陸贄・陽城の伝に立ち返ると、韓愈が「実録」としてはその体裁上非常の措置を講じて永貞元年とはまるで関わりを持たない陸贄等の伝を附載した理由が見えてくる。すなわち、讒言に遭うことと政治上の野心の挫折ということと、その原因は異なるにしても、自分の信じた道を貫こうとして志半ばに倒れたという状況は、柳宗元等の場合も陸贄等の場合も同じだからである。この点に注目すると、韓愈は巻四の伝を以て柳宗元等への思いを重ね合わせたとも考えられる。とくに陸贄や陽城が度重なる左遷のあげく政治の中心から締め出され、ついに長安に召還されぬまま孤高を守つて世を去るに至る描写の背後に、僻地に流された宗元や禹錫をこのまま政治的に埋もれさせることなかれ、という韓愈の訴えかけを読み取ることがさほど難しくはない。『順宗実録』に見られる異例の評伝は、韓愈のこのような意図に基づくものと考えられる。

#### 注

(1) 以下、『順宗実録』の引用文は馬其和校注・馬茂元整理『韓昌黎文集校注』（上海古籍出版社、一九九八年）に拠った。なお、『順宗実録』はすべて同書外集上巻に収められている。

(2) 宋、高承撰『事物紀原』巻四に、「三代の王に左右の史有りて、其の言動を記す。漢の武に禁中起居有り、明帝に起居注有り。而れども実録と名づくる者無く、唐芸文志載する所の実録は、周興嗣の梁皇帝実録より始めと為せば、則ち其の事茲よりして以て始と為すなり」とある。

(3) 『順宗実録』巻五、韋執誼の伝に付されている。巻五に見える王叔文・韋執誼の伝は、巻四に見える陸贄・陽城らの個人的な伝とは異なり、多くの人々との関わり合いを通して順宗期に至る王韋それぞれの政治的行動を浮き彫りにしたものとなっている。

(4) 「若き日の韓愈―争臣論ノート」(『韓愈と柳宗元―唐代古文研究序説―汲古書院、一九九五年)の中で、次のように述べている。「陸贄や陽城についてのくわしい記事をみてみると、それは、一言でいえば、これらの人びとに対する韓愈の熱心な尊敬の表白といつてよい」

(5) 巻一四九、張商伝。

(6) 巻一四九、令狐峒伝。

(7) 『旧唐書』巻一三九、『新唐書』巻一五七、ともに陸贄伝。

(8) 『旧唐書』巻一三八。

(9) 巻二三四 唐紀五〇。ただ、該当箇所に付された胡三省の注には、以下のように司馬光の記述に異を唱える評語が見られる。「按ずるに贄の長官をして厠吏を挙げしむるを請う状に云う、亦た私かに親しむ所を訪うに由り転じて亮る所と為り、其の弊遠きに非ざれば、聖鑒みて明らかに知る、と。此れ乃ち参を解するの語なり。参の死するに及び、贄を救解すること甚だ至れり。是れ由り之れを覩れば、贄豈参を殺すの意有らんや。且つ贄公輔に語るの時、安くんぞ公輔の道士と為らんことを請い、上の前に及びて言を泄らすの罪を以て参に帰するを知らん。此れ乃ち公輔の意にして、贄の意に非ざるなり。當時の人、参、贄に隙有るを見、遂に己が意を以て之れを猜(うたが)う。史官の贄を悦ばざる者、囚りて罪を贄に帰せんとするのみ。今取らず」なお、陸贄の「長官をし

て属吏を挙げしむるを請う状（請令長官挙属吏状）は、いま『全唐文』卷四七二に収められ、「台省長官をして属吏を挙薦せしむるを許すを請う状（請許台省長官挙薦属吏状）」に作っている。

(10) 『全唐文』卷四六六。

(11) 『韓昌黎文集校注』卷二。

(12) 公孫丑下篇に「曰く、吾之れを開けり。官の守り有る者は、其の職を得ざれば去り、言の責め有る者は其の言を得ざれば去ると。我に官守無く、我に言責無きなり。則ち吾が進退は豈綽綽然として余裕有らざらんや」とある。

(13) 『順宗実録』卷二に「故の相忠州刺史陸贄、郴州別駕鄭余慶、前の京兆尹杭州刺史韓皋、前の諫議大夫道州刺史陽城を追して京師に赴かしむ。徳宗貞元十年より已後、復た敕令有らず。左降の官名徳才望有りと雖も、微過を以て旨に忤り譴逐せらるる者は、一たび去りて皆復た叙用せられず。是に至つて人情大いに悦ぶ。而るに陸贄・陽城は皆未だ追詔を聞かずして、遷所に卒す。士君子之れを惜しむ」とある。

(14) 松本肇「韓柳友情論」（『柳宗元研究』創文社、二〇〇〇年）に、次のような指摘がある。「韓愈はかつて陽山の令に左遷されたとき、柳宗元と劉禹錫の二人が関与しているのではないかと疑った。それが彼らの友情を引き裂くことはなかったとはいえ、自分の友人を疑つた苦い体験は、韓愈の心に深い自責の念を呼び起こさなかつたろうか。韓愈が、『順宗実録』の編纂を命じられたとき、その重い腰を内側から支えていたのは、自分の友人が参加した政治運動の歴史的意義を公的な記録に正しく留めることこそ、彼らを疑惑の眼で眺めた心の背信を償う唯一の道に他ならない、と見なす自覚ではなかつたか」また、「韓柳友情論」の注にも引かれる稲葉一郎「順宗実録考」（『立命館大学』一〇）の余論でも、「王叔文らに対する主観的な批判とは別に書き加えられた政治・政策に関する客観的叙述は、いわばそのような友人たちによつて決定・実施された政治の記録であつた。かかる韓愈の客観的な叙述には、この文を通じて結ばれた交友を弁護しようとする態度が暗黙の中に示されているのである」との見解が示されている。本論で

も最終的には柳宗元・劉禹錫ら友人たちに対する擁護が仄見えるとの結論を示した。が、上記各論の見解が『順宗実録』に於ける本来的な実録としての部分――すなわち朝廷に於ける政治上の出来事を記した箇所の韓愈の書きぶりから引き出されているのに対し、本論では卷三、卷四に見られる個人の伝に注目し、そこから抽出される韓愈の人間評価を以て柳劉への思いに繋がるものを浮き彫りにすることができたと考える。思うに交友関係というものは、必ずそこに友の人格や才能に対する畏敬の念を伴うものであり、韓愈が『順宗実録』に異例の伝を置くことによつて表明される人間評価は、彼自身の友人たちに直接関係するものということができる。